

以上、明・趙開美版の『仲景全書』とその日・中の別本、およびそこに編入された『集注傷寒論』十巻と『張卿子傷寒論』七巻に関する相互関係を考察した。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

## 医師赤川玄樸と松岡茂章

田 中 助 一

第八十九回日本医史学会総会が新潟市で開催されることとなったので、明治初年に新潟で活躍した二人の長州出身の医家(赤川玄樸と松岡茂章)について紹介したい、と思う。

(一) 赤川玄樸(一八三七～一九〇三)

天保八年三月十七日に萩藩医品川玄良(針医、岡崎玄隣(伝)の二男として萩の西南郊奥玉江に生れた。幼名を熊之允と言ったが、二歳の時同藩医赤川玄成(本道医、人見法印慶安伝、食禄百七十二石)の養子となり、成長して通称を玄樸と改め、明治六年に迂一と改めた。養父玄成は小石元瑞の門人で、藩主毛利齊元の侍医や、藩の医学館教授やその他の要職をつとめた人である。

玄樸は医学及び蘭学は、はじめ養父より学び、安政元年二月より医学館の入舎生となり、翌二年舎長役及び引痘掛

となった。安政三年三月他国修業を許されて江戸に赴き、薩摩藩医であった川本幸民の門に入った。安政六年正月退塾して下総佐倉の佐藤舜海（尚中）の門に転じた。四年後の文久三年四月京都滞在中の萩藩世子毛利定広（元徳）より呼び寄せられたので、佐藤の門を辞して京都に至り、その侍医となった。同年五月定広に扈從して萩に帰り、医学館助教役兼都講座の用向をも取り計らうよう申しつけられた。同年五月十日赤間関（下関）において攘夷戦が起つたので、定広に従って赤間関に行き、赤間関病院創立の規則を定め、侍医役より病院総督兼勤、赤間関滞在を仰せつけられた。ここにおいて奇兵隊その他諸隊の設立した軍病院は皆玄樸の指揮下に入ったのである。元治元年二月赤間関を去って山口に赴き、元の通り侍医現勤、医学館助教役をつとめた。同年五月藩兵が続々として上京したので、定広も海路軍を率いて上京することとなり、玄樸は侍医兼病院総督として随行した。しかし途中で禁門の変が勃発したため定広の軍は山口に引き揚げた。同年七月長州に亡命した七卿の診察掛を命じられた。同年十二月世子の侍医を辞職し、医学館助教役専任となった。元治二年（慶応元年）二

月萩に病院を造ることとなってその惣轄を命ぜられた。尚その年正月から萩細工町の自宅で開業した。同年八月萩の医学館が山口に移転し、その跡が医学小学となり、その教授を仰せつけられた。慶応二年七月六日養父玄成が六十三歳で病没し、同年九月十八日家督を相続した。時に三十歳であった。同四年（明治元年）五月二十六日藩主毛利敬親の侍医となったが、ただちに北陸鎮定軍に従軍を命ぜられ、八月十八日に「御雇を以官軍病院頭取被仰付候旨御沙汰候事」という辞令を授けられた。その頃戦争が激烈となって傷病者が多くなったので、昼夜兼行して東京に至り、太政官に出頭し、英医ウィリス招聘のことを請い、その命令を奉じてウィリスを横浜に迎えに行った。明治二年四月各病院の患者がすべて退院したので、玄樸も任務を終って帰藩した。同四年七月廃藩置県となって従来支給されていた給禄がなくなった。同年十一月萩にある毛利家諸御殿居住の方々の診察御用を仰せつけられた。同五年七月萩の橋本川の中渡なかわたしに私費で橋をかけることを県に請願し、十月に許可された。同八年九月山口県下各大区に医学社を設置することとなり、玄樸（迂一）は第二十大区の管事（医学分社長）

となった。同九年九月一日同区の医務取締を仰せつけられた。同十一年二月十五日山口県医師開業の証(第二百三十六号)を受領、同年七月八日種痘施術免許証(第三百三十八号)を受領した。同十二年七月山口県下にコレラの大流行があった時には、虎列刺病掛医員取締兼檢察掛に任ぜられ、内務卿より賞賜された。同十五年十月七日赤間関に転出、西南部町で開業し、同三十六年二月五日に六十七歳で没した。墓は萩の安養寺(浄土宗)にある。家に残っている「誠意堂主人入門録」には県内外の門人七十三名がのっているので、名声が高かったことがわかる。廃藩後中央に出なかったことが惜しまれる。

(二)松岡茂章(一八四二—一九一三)

松岡家は長門国長府藩医で、永富独嘯庵の甥松岡道遠哉茂の子孫である。

茂章は天保十三年七月八日緒方玄貞の三男として萩で生まれ、長府藩医松岡文安の養子となった。長崎に遊学して蘭方医学を学んだと言われているが師家は明らかでない。明治初期に新潟県に居て、長岡・柏崎・新発田等の公立病院長を歴任し、更に但馬豊岡の病院長をつとめて国に帰り、

下関及び長府で開業し、山口県医会理事や豊浦郡南部医会会頭等を選任された。そして明治四十五年三月十九日に七十一歳で没した。墓は長府の徳応寺(浄土真宗)にある。

(萩市)